NARUTO～(仮)

失踪する鎧

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は禍津日・・・ イザナギが禊を行って黄泉の穢れを祓ったときに生まれた神だ。現在暇をしている最近あちこちで転生をしていると聞く。この前も変な神が転生させてたな、よし俺も転生”する”か。万能の目が俺にはあるしな

転生先は・・・ ＮＡＲＵＴＯでいいなそうしよう

というわけで神様転生でも神様”が”転生になりました・・・ ん？

【俺も連れて行ってくれー】

あ・・・ チートが増しました。” 戒められし氷狼”が飛び込んじゃいました。

目　次

キャラ設定 ―― 1
帰郷～班確定 ―― 3
班発表～遅刻 ―― 6
屋上～自己紹介 ―― 9
試練1 ―― 11
試練2 ―― 14
対話～序～ ―― 17
対話～弐～ ―― 19
対話～九尾遭遇～ ―― 22
対話～九尾対話・完～ ―― 25
波の国　出立 ―― 27
波の国　その2 ―― 29
波の国　その3 ―― 32
波の国　その4 ―― 34

キャラ設定

オリキャラの紹介です。

名前　四季　夜叉（シキ　ヤシャ）

四季は式から一文字じゃつまらないという独断から二文字にしました。

年齢　ナルトより3つ上。ナルトが生まれた時には既に歩けるという設定して上そうしました。

性格　きまぐれ

転生多い→俺も転生してやるぜ、のノリでやっちゃってます。

オリ設定

忍術　体術　幻術の他にチート要素で、鬼術　神力　があります。神力に関しては漂う力とだけ…後々説明混ぜようと思います。鬼術は主に実戦で使います。角が生えるとか力ｕｐとかが基本です。血化粧（ちけわい）」についてですが、某侍狂漫画から持って来ております。

封印されてる子

性質は得意なものです。

朱雀☒クシナに憑いています。

温厚な性格で、非常に優しいが怒ると危険

性質は火と風

玄武☒非常に無口だが蛇は喋る

性質は水と土と木

青龍☒挙動不審な時が多い。

性質は水と風

麒麟☒ミナトに憑いています。

性格は落ち着きが無い。宿主に似て?技に飛び抜けた変な名前を付ける。

性質は雷

白虎☒四獣＋麒麟＋黄龍の中で一番若いのに喋りは古風な時がある。

風と水と雷

黄龍⊠四獣＋麒麟＋黄龍の中で一番硬い防御を持ってる子。しかしいつも寝ている。
性質は雷
白狐⊠いのに憑くことになった子。基本的におとなしいが、興味のあることにはのめり込む
性質は宿主に似るが、火を得意とする
蛟⊠既に誰かに憑いている。青龍に似て優柔不断なところがある
性質は水
天狗⊠話そうとするといつも玄武の蛇に邪魔をされるため声は未だに不明
性質は風
他は後々纏まったら追加します。
四季の一族
神力（秘術）をもつ家系。チャクラとは別に有している為、点穴を突かれても神力を使って点穴を解放することができる。
一族の中で、長の家系はどのような血の持主を嫁や夫に迎えたとしても純潔が生まれる。ただし得意忍術は親に依存する。
オリキャラは神様の転生という特異例な為異なる。
うちはのクーデターに不参加組は現在この一族に匿われている。人数はあまり知られていないが、３０人は居るとされている。もちろんサスケはこの事を知らない。
中でも実力者とされるのは、うちはシスイ・のはらリン・うずまきクシナ・波風ミナトが居たが内２人は残り後の２人は木の葉に戻った。
一族の隠れ里に入る為には一族の血が必要である。何かしらの理由で入れたとしても、門の前には各チャクラに応じて能力を変える鬼が４匹いる為人はあまり近づかない。
再不斬と白も四季の里及び木の葉の特別上忍になった。

帰郷〜班確定

２年程あちこち行っただけだが、木ノ葉も久しぶりだな…まずは火影にでも合うか…「？？？？？？？？？」わかってるお前たちもちゃんと教えるよ

〝コンコン〟

「火影様誰かと来る予定がありましたか？」

白髪の気怠そうな忍…畑カカシが火影様に問う

「いやこの時間は無かったはずじゃ」

「それじゃ誰かしら？」

もうおじいちゃんと言われても何ら遜色無い火影様がカカシの問いを否定する。すかさず、現在この部屋にいる唯一のくノ一…紅が誰だろうと問う。その答えは入ってきた人物が答えた

「失礼します。…あっお取り込み中でした？」

「誰だ？」

「そちらこそ誰ですか？火影様以外分からないんですけど？」

カカシは「誰だ？」と問うと逆に聞かれてしまったが、木ノ葉の額当てをしているのに里の上忍３人…カカシ、紅、アスマを知らないというのは些かおかしい。アカデミーの講師のイルカも誰か分かってはいない。しかも今は班決め最中で、他の人が来る予定など無かったのである。

「とりあえず名乗ろうか。俺は畑カカシ、上忍だ」

「私は紅。でこっちの髭面「おいその呼び名やめてくれ」いいから…髭面がアスマ、後の１人はアカデミーの講師でイルカよ」

上忍と講師だったんですね。という事は原作の班決め最中でしたか…運が良いのやら悪いのやら

「俺は四季　夜叉（シキ　ヤシャ）と言います。２年程あちこち行って帰ってきたところです」

「おぉ。夜叉だったのか大分印象が変わったのぉ」

「あとカカシさん？貴方は俺のことしってるでしょ？」

「はて？記憶に無いな」

この人のことだ。あえて分からないふりをしているか、忘れている

のだろう。たぶん後者だと思われるが
「忘れているならそれで良いです。後、紹介？したい人が２人居ます。みなさん知っている人ですよ」
「カカシと顔見知りだとしてもだ、俺たちの知り合いでは無いのに知っている人だと？信じられんな」
　たしかにアスマの言う通り信じられないだろう。しかしこれから出てる人も信じられないだろう
「お久しぶりですね猿飛先生。カカシ」
「久しぶりだってばね」
「「「なっ」」」
「生きておったのか⁉？ミナト、クシナよ」
　九尾事件の際、行方不明となっていた四代目夫妻である。
「彼のおかげである程度まで回復しました。ですが、里の人によると死んだ扱いになって英雄視されていますので時が来るまで暗部として身を潜めようと思います。」
「でもナルトの側には居るってばね」
「俺も当分下忍生活しようと思います。」
「ちょっと待ってくれ、先生。経緯を教えてくれないか？」
　九尾事件の際、赤い鳥と金の鹿のようなものを見たという声が上がっているのは火影の耳に入っている。そしてミナトとクシナの体が無くなったのである。
　実は赤い鳥と金の鹿のようなものは朱雀と麒麟であり、それぞれ麒麟はミナトに朱雀はクシナに尾獣の代替として入り込んだのである。
　一命は取り留めたが、馴染むまで夜叉の側を離れることができなかったのである。
　ちなみに九尾はほぼ完全体でナルトにｉｎしてます。
「そういうことでしたか」
「火影直属の暗部にしておくかのぅ。朱（アカネ）と黄（コウ）じゃな」
「わかりました。これからそのように名乗ります。」
　とりあえず紹介が終わった事だし帰ろうとしたが、気になった事があるので聞いてみた

「俺は下忍なんすけど、どこ入れば良いですかね？」
「おぉそうじゃったな。今回は特殊な例として、カカシの第七班に入ると良い。明日挨拶があるからの」
「なんだか遅刻しそうな人ですねぇ…　わかり魔した。とりあえずどっか家探してきます、金なら一応一軒家買えるだけ持ってますんで」
　そう言って夜叉は去り、ミナトとクシナは面を受け取り再開の団欒を三代目達と楽しんだ。

班発表〜遅刻

今日は”俺以外の”班が決まる日である
「サスケくんと同じチームが良いな」
「私も！」
女子はエリートのうちはサスケと同じチームになりたくて競っている
「なぁナルト」
「なんだってばよ、シカマル」
「一番後ろに座ってる青い髪のやつ知ってるか？」
ん？青い髪のやつなんてアカデミーにいたっけ？シカマルに聞かれて後ろをチラッと見てみたが全く見た事無い人がいた
「ごめん、知らないってばよ。」
「ナルト、シカマル。あんな臭いするやつアカデミーどころか里にすら居なかったはずだ」
犬塚一族のキバですら分からない人が居ることに馬鹿でも唖然とした。スパイか？迷子か？とナルトは考えたが分からないので諦めた。しばらくすると、イルカが教室に入ってきて行った
「みんな待たせたな。今から班分けを発表する。班はこちらでバランスが良くなるように組んでおいた」
「えーサスケくんと組めないじゃん。自由にしよーよ」
「そんな事したら人が固まるだろ。文句は聞くが受け付けないからな。まず第一班…」
やっと班発表が始まったか。大分寝てたな俺、視線が痛い。絶対『誰あいつ』とか言われてるよ。《仕方が無かろう》《そうだね》《こやつだからしたかたあるまいて》黙れお前ら良い宿主見つけてやるからな？《そういうことではないと思うぞ主》
「…では次、第七班。うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ、四季　夜叉」
「やった！（サスケくんと同じ）ナルトは要らないのに（ボソッ）」
「デコリン後で覚えてなさいよー！」

「イルカせんせー」
小声で言ったつもりなんだろうが丸聞こえだよピンク髪…ナルトも聞こえてたみたいね、落ち込んでる落ち込んでる。でも1人多い事に気付いたみたいだな
「どうしたナルト」
「最後の人って誰だってばよ」
「後ろにいるだろー寝てるやつそいつそいつ」
そのご再開して全員伝えきった後イルカは「担当が来るから待つように」とだけ言って出て行った。しばらくして…
「第十班、こっちに来い。俺が担当上忍の猿飛アスマだ。よろしくな」
「あ、髭だ」
「「上忍を髭扱いしたー!??」」
なぜそんなに驚く。昨日紅とかいうクノイチが、髭って言ってたから言っただけなのに
「こほんっ、他の担当もすぐ来るから待っているように。後髭扱いはやめてくれな?」
「りょ〜かい」
上忍にたいして適当に対応する姿を見てすごい度胸とみんなが思ったとか思ってないとか…
待つ事2時間半一向に来ない第七班の担当…サスケは貧乏ゆすりをしだして、しまいには人差し指で机を叩きだし、サクラはサスケをちらちら見ながらぶつぶつ言い出すしナルトは寝てたし…俺も寝てたよ2時間程。どうすっかな
「おっそーい。ナルト探してきなさい!」
「誰かわからないのに探しようがないってばよサクラちゃん」
そうだよなー3人とも担当知らないもんな。俺は昨日聞いてたしね。
「イタズラしてやるってばよ」
「おっ金髪俺もやる」
「やめときなさいよ」
セッティング完了。後は来るのを待つだけだ

「失礼するよっ……典型的なイタズラだね…ぶっ」
ナルトは黒板消しを仕掛けた。俺はその上にデスソースを仕掛けたのだ。バケツ一杯のな。
「遅刻した罰だ。食らっとけ」
「俺のは止められたってばよ」
ナルト…どう見てもバレバレだったぞ

屋上～自己紹介

はい。俺たちは今屋上に居ます。あの後カカシは保健室に運ばれ、治療されました。目が痛かったそうです。

遅れた事を謝らなかったので、次も何かしてやろうと思います。余裕があれば。

「よし揃ってるな。うーん、そうだな。まずは自己紹介でもしてもらおうか」

自己紹介は大切だよね！

「まずは俺から。はたけカカシって名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない。将来の夢って言われてもなあ…趣味はいろいろだ」

「この人自己紹介する気ないってばよ」

「じゃあお前から順にやれ」

「オレはうずまきナルト！好きなものはラーメン。将来の夢はみんなに認められる火影になる事だってばよ」

認められたいのか…一部には認められてるのにな。里の奴らなぞ烏合の衆と思えば良いもの《そう思えるのは主だけであろう》そうかねぇ

サクラの自己紹介流しちゃった…まぁある程度わかってるしいいかな。じゃぁ次はサスケか

「名はうちはサスケ。嫌いなモノならたくさんあるが、好きなモノは別にない。それから……夢なんて言葉で終わらす気はないが、野望はある！一族の復興と…ある男を殺す事だ！」

「殺せるの？本当に？」

思ってた事言っちゃった～

「お前に何がわかる！」

睨まれた（・・ω・、）全然怖くないわ…クシナに比べると

「カカシー今日はする事ないの？」

「呼び捨てか…その前にお前も自己紹介しろ。」

「えー仕方ないなー。俺は四季　夜叉　、四季って呼んでね。好きなものは狼かな？食べ物はなんでも食うから好き嫌いは無い。趣味は

新術作成と放浪かな。得意忍術は無いけど強いよー俺は」
　みんななんで嘘くさいみたいな目つきで見るの？泣いちゃうよ？
「なんとなくだがお前らの事が分かった。一名嘘くさいのもいたけどな。明日はまずこの人数で演習を行う。」
「演習ならアカデミーでたくさんやったわよ」
「アカデミー…？2年半前に行ってた記憶無い…」
「だだの演習じゃな…どうやって額当て貰ったの？君」
「気合い」
　もちろん気合いでは無い。四季の一族…正確には式の一族は〝力〟を使えるものは皆額当てを試験を無しに貰える。それほどまでに希少な能力なのだ。技術は無くとも特別上忍クラスの力だけはあるのだ。
「あっ…そう。で…だ、演習と言ってもだだの演習では無い。例年脱落者は多い超難関演習だ。」
　サスケとナルトは息を飲み、サクラは言葉に詰まっている。演習は明日行うんだろうなーたぶん
「演習は明日行う、忍び道具一式を持って朝6時に集合。朝飯は抜いておけよ吐くぞ？では解散」
「あいつ絶対遅れるだろ」
　カカシは解散の言葉で消えたのでわざわざ小声にせず声に出した。
「朝飯食うなって言われたけどさ、おにぎり1つは食べとこう。今日みたいに遅れてきたら逆に動けないだろ」
「確かにな。」
　そういってサスケは帰って行く。それを見てサクラが追いかけ、それをナルトが追いかけて行った。…寂しく無いよ？置いてけぼりにされたからって泣いてないよ《主、心が泣いておるぞ》言わないで、ただでさえそんなに無い格好がつかないから

試練1

さぁ今日は演習だね！案の定、カカシは遅れております。だいたい3時間は経ってますね。
「「遅い（ってばよ）」」
「本当に遅れてるわね」
ナルトとサスケがハモった。顔を背け合うが遅いから仕方ないな
「本当に四季さん？が言ったように朝食べておいて良かったわ」
「お待たせ～」
「「遅い！」」
「連絡くらいだせよ！上忍だろっ。案山子にするぞコラ」
しかしおかしいな周りに気配が沢山する。なぜだ
「ごめんごめん他の上忍達が君・達をみたいと言ってたから遅らせたのよ」
「あーなるほど、周りにいる複数の気配はそういう事ね」
しかし君の時にこっち見てなかったか？
「まっとりあえず１２時にセット。制限時間は3時間、任務達成は俺から鈴を奪う事。取れたら昼飯の弁当をやろう、ただし先に食べようとしたら丸太に縛り付けるからな」
鈴が3個ね…仲間割れを誘うのかな？こいつらに連係があるのかわからないけどさ。
「どうして3個だけなんですか？」
「おっサクラいい質問だね。これは最低でも1人脱落してアカデミーに戻るからだよ。手裏剣でもなんでも使ってとりにこい」
「それだと先生があぶ「サクラだっけ？いくら遅刻魔でも上忍だよ？俺らより格が上。余裕なんでしょ」そうね」
「そゆこと。では初め」
と言ってカカシは消えた。まぁ無駄だと思うが聞いてみるか
「手を組まないかな？みんなで取りに行けば良いと思うんだが」
「勝手にしてろ。俺は1人でやれる」
やっぱりサスケは1人でやるつもりなんだね。サクラは追いかけ

て行っちゃうし
「で…だ、金髪…いやナルトはどうする？」
「考えがあるってば？「あぁ」じゃあ手伝うってばよ」
「じゃあ作戦会議な」
　しばらくして。そろそろかな？さっきサクラの悲鳴が聞こえたし幻術でもかかったかな？…あっカカシが２人を連れてきたか
「２人とも残念。そこでおとなしくしてなさい。ナルトと四季はやらないのかい？」
「後１時間しか無いよ？」
「余裕。本読んでると死ぬと思えよ。本気で殺りに行くからな」
　カカシが目を見開いて本を閉じしまった。すぐに森に隠れるあたり見極めに来るんだろうな
「行くぞナルト」
「応ってばよ！多重影分身の術」
　ナルトは約５０人位に分身し散会して行った。たぶんこれ火影とかも見てるだろうし少々”力”見せてやるか。チャクラを貯めていると右手の森から「居たー！」という声がした。その後森から追い出されたようだ。ここまでは作戦通り。
「やるねぇ森から追い出すのがもくてきか」
「その通り。ナルトに追われて体が温まりましたよね？今度は俺が行きますよ？…ナルト最後は任せるぞ」

　さて何が来るんだ？四季の練っているチャクラからして相当なものが来るはずだ。一体何がっ‼？
「手裏剣影分身の術」
　なっ…なんだ今の術は当たら無いコースだったから見逃したがざっと見１００はあるな。これ以上知らない術は困る、写輪眼を使っていないなら尚更だ。畳み掛けますかね。
「水遁・すっ…こりゃ参ったね。ナルトは誘い出しだけかと思ったけど術の発動を狙って起爆札付きのクナイを投げてくるとは。」
「これが作戦だってばよ！」

「忍術の少ないナルトに誘い出しと術の阻止をさせて四季が攻める連係ね。お見事…でもナルトには終ってもらおうかな」
「させるとでも？」
　残念、影分身を使わないとは俺も言って無いからね。
「影縫の術」
「動けないってばよ。作戦失敗だってばよ…四季ゴメン」
「いや、遅刻魔が忍術を使うとは想定していなかった俺が悪い。後はなんとかしてみる」

試練2

さてなんとかしてみると言ったもののどうしますかね。チームワークはまだまだだろうけど協力という事で合格はしそうなんだけど…時間切狙うか。火影の爺さん何見てるの？実力見せろとでもいうのかね？…一応写輪眼、輪廻眼、白眼、その辺使えるけど、晒したく無いしなぁ。仕方が無い手裏剣蒔いたしあれやるか。

「遅刻魔行くぞ。防いでみろ」

「その呼び名決定なのね。でも遅い、水遁・水龍弾」

水の弾が迫って来る。流石は上忍威力が高そうだ。

「でも残念。」

「ぐっ…」

なぜだ、後ろから蹴りか来た。まさか今の技は…

「考える余裕などあるのか？」

「なっ」

速い…攻撃から次の移動までが流れる様に飛んでくる。防げないことは無いが、これでは攻撃できない。これが下忍なのか？いや中忍…中でも上忍に匹敵するレベルだぞこれは、流石に少々本気を出しますか。

影分身の術からの瞬神の術で四季の後ろへ。

「これで終わりだ。火遁・豪火球の術」

「これで終わりだ。火遁・豪火球の術」

来たよ待ってましたよ、姿が隠れるほどの技。分身は倒したからここからは誰も見せたことが無いから驚くだろうな。

「秘術・風刃剣そして秘術・血化粧（ちけわい）」

風が目に見えるカタチで小太刀サイズの刀となる。風遁でもできないことは無い、なぜ秘術かと言うと俺が使う分には印も必要としないからというのが表向きだ。

この術の前では相性関係なく術を斬れる。今は刀のサイズだがや

ろうと思えば尾獣クラスまでできる。そこまでにするとチャクラ消費量おかしくなるけどな。
秘術・血化粧(ちけわい)これは呪印と同じ様に身体中に模様が付くが、呪印とは性質から異なる。どの属性でも纏え、且つ自らにマイナスの負担が一切無いのだ。使える人の適正は厳しいけどね。
「刀術・焔切りか～ら～の秘術・焔纏」
「～の秘術・焔纏」
「なっ」「うそっ」「すげぇってばよ」
四季　夜叉…突然チーム入りしてウスラトンカチなんかと連係するからどんなやつかと思ったらなんなんだあの強さは。あいつを倒すためにあの力が欲しい
四季さん？がカカシ先生の豪火球を斬り裂いたと思ったらその炎を纏っていた。アカデミーでも基本的なことしか習わなかったしあんな術知らない。馬鹿ナルトもよく連係できたと思う。サスケくんは悔しそうに見てる…
すげえってばよ。何あれ何あれ教えて欲しいってばよ！
上からサスケ、サクラ、ナルトである。
「これでとどめだ！〝ジリリリリリッ〟ん？あっ時間切れか」
「今殺すつもりできたでしょ。あれは先生流石に死んじゃうと思ったよ」
「上忍なんだからこんなとこで、死にそうになるな。しっかりしろやクズ」
「そんなこといっても纏ってた炎何？近づいただけで訓練用の殺傷精度が低いこのクナイ溶けちゃったんだけど…　まぁいいよ。みんな集まって」
カカシはみんなを集めてとりあえずといった酷評。サスケとサクラに「忍びを辞めろ」と言った。
「なんで私達だけなんですか？そこの2人も取れなかったじゃ無いですか」
「サクラだっけ？今回の目的しっかりと理解してる？」

「鈴取りでしょ？ねぇサスケくん」
「最初はそう思ったが違うんだろ夜叉がクリアなのは練度からして当然かと思うけど、ナルトがなぜ？と思った。結果出た結論はチームワークだ、ナルトと夜叉はチームワークを意識した。オレは1人でやろうとしたその差だろう」
ほぅ…見てることは見てるんだな。ただのワンマン馬鹿かと思ってたわ。いやマジで、大蛇丸に渡すのは忍びないなぁ…なんとかするか。
午後からも再度行うということでサスケとサクラは弁当を渡してもらえなかったので、俺は譲った。飯持ってきてるからね！仲良く？二人で分けて食べているのを見たカカシが合格宣言をした。

対話～序～

第七班としてDランク任務を続けていたある日火影のじいちゃんに俺とカカシに来るように呼ばれた。今日の任務は草引きだったので、みんなに任せる事とした。

〃コンコン〃

「失礼します」

ノックをし、扉を開ける。カカシが先に入るべきだろうと思ったが気にしない

「よう」

「お久しぶりね」

そこには班決めの際（※一話目）居た上忍が居た。

「おぉ来たな四季よ。今回呼んだのはなお主にも暗部に入って貰おうかと思うてな」

「えー暗部ですか?ダンゾウ嫌いなんで根だけは嫌です。闇討ちしそうになるくらいですもん」

「闇討ちって君ね…」

ダンゾウが嫌いな理由は…うちはの〃クーデターに参加する事を拒んだ〃一族の数名をイタチとシスイに頼まれて四季が保護していた際、ダンゾウがその者たちをよこせと襲ってきたからである。しかもその時、既にシスイの目は奪われた後だった。

もう片方の目をイタチに預けて死んだと思われているシスイは現在、別天津神を開眼できていない状態であるが、写輪眼は使える状態まで〃目を蘇生〃してあり、四季の鬼（里で言うところの暗部）として生きている。これを知っているのは四季の者を除いてイタチくらいだろう。

「安心するがよい。火影直轄だからダンゾウとは会う事はないだろう」

「じゃぁなってもいいよ～」

「かっ…軽いわね」

軽いと言われた…まぁ気にしない、気にしたら負けな気がする。そ

んなこんなで、暗部について話がまとまった。ナルトを魔改造するためにやりたい事があったので、尋ねる事にする
「ひとつお願い？があるのですが、いいですか？」
「ん？なんじゃ？」
「相手の心を読み取るというか中を覗くような術ってわかります？」
「わかるとも。じゃがそれを知ったところでどうするのじゃ？」
「ナルトの中の九尾と対話する」
　九尾と対話…その事を聞いた上忍はナルトの中に居た事を俺が知って居たのかという顔をしている。火影のじいちゃんはびっくりしすぎて顎が外れかけたようだ。上忍の中でいち早く我に返った紅が疑問をぶつける
「対話してどうにかなると思ってるの？」
「なるよ。詳細はめんどいので説明しないが、ナルトに対して協力的にさせる事は可能だと思う。暴れたら暴れたで沈めるし」
「ふむ、アスマよお主の班にいのいちの娘がおったじゃろ。連れて行ってあげなされ」
　暴れたら沈める→忍術でだよ？秘術とかもあるしね。
「では行こうか。四季君だったか」
「行きましょー…あっカカシ、ナルト連れてきてね。いのいちさん？の所に着いてから1時間以上遅れたら〝特製ヘルソース〟飲ませるから覚悟してね。」
　特製ヘルソース…市販されているデスソースの15倍の辛さを追求した作品です。うずまきクシナ監修、味見役　畑カカシ、九尾
　辛くて九尾が泣いたと言う。クシナ談
「お、遅れないようにする。あれは死ぬ。二度と嫌だ」
「そんなに辛いのかのぅ。どれ儂も一口「やめましょうね～おじいちゃん」そうか、残念じゃのう」
　火影様…舐めただけでぽっくり逝っちゃうんじゃないかな。カカシはミナトの変わりに味見役をさせられていたトラウマがあります。

対話〜弐〜

あの3人かな?今日は修行だったのか…悪いことしたかなぁ
「おーい、いのちょっとこっちに来てくれ」
はーいという声が聞こえて薄い金髪の女の子が走ってくる。女の子は俺を見て誰?っていう顔をしているのが丸わかりだ。後ろから後の2人もこっちに来ていた。
「ハジメマシテ。俺は四季　夜叉っていうんだ、よろしく」
「私は山中いの。こっちの怠そうなのは奈良シカマルで、ポテチを食べてるのは秋道チョウジっていうの」
「いの、いのいちさんは今日は家にいるかい?」
「今日は非番って言ってたから家にいると思う。それがとうかしたの?アスマ先生」
「彼が会いたいそうなので連れて行ってもらえるかな?後の2人は、今から修行だ」
そういって2人を連れて行くアスマ。シカマルは引きずられたまま手足を投げ出して、チョウジはそれでもポテチを食っていた。

パパに会いたいって人よく居るけど、初対面の人大丈夫かな?アスマ先生の頼みだし安心して良いのかなぁ
「いのちゃんだったかな?やっぱり不安?」
えっ顔に出てたかなっ…
「安心して?っていうのも変かな。何もしないよ」
「う…うん」
ちょっと恥ずかしいな…家まで早く帰ろっ

ふむここがいのちゃんの家か。どっからどう見ても花屋だねぇ…青い薔薇とか無いかな…この世界では育成できるんだけど無さそうだなぁ
思考が逸れた天国と猛省しなければ
「ここが私の家だよ。パパー」

「呼んだかい？いの。あっお客さんですか、どの花にしますか？」
「花も良いんだけど、ちょっと込み入った話があるんですけど今は良いですか？」
「良いよ。いのお茶用意し「はーい」聡い子だ…奥に連れて行ってもらう。1時間以内にこれるかな？特製ヘルソース飲ませたいんだけどなぁ。ゆうはんを食べていると思われる机と椅子に誘導され座る
「さて込み入った話とは何かな？」
「大きな狐の話なんですけど、いのちゃんも居て大丈夫ですか？」
「いづれは知ることだからなぁ」
　親バカ発動！いのいちは機密事項だけどいずれ知るからと許可した。（電波みょんみょんみょん）
「じゃぁ良いでしょう。いのいちさんは相手の心に入ることは可能ですか？精神世界と言うのかな？そこに自分と当事者と別に連れて行く事もですか？」
「可能だよ。でも僕のチャクラ量だと連れて行っても、すぐ戻ることになるけど」
「入れたら大丈夫です。あそこはちょっと別なので入る出るだけできれば大丈夫です。」
「大きな狐というのはどういうことかな？もしかして「人くらい？」違うよいの。もっと大きいんだ…彼の言っているのがパパの予想通りだと」
　へぇ…なかなか考えるんだこの人…まぁそろそろこっちに向かってきてるし素直に話そう。予想しかされてないけどほぼ当たってるしね
「九尾の事ですよ。いのちゃ「いので良いよ」…いのは知っているかな？九尾を」
「アカデミーで習ったけど封印されてるって聞いたよ。誰かが言ってたけどナルトにって」
「噂すげぇ…でだ、いのいちさん連れて行ってくれるかな？九尾の所へ。ナルトと協力するように促すつもりなんだ。」

やはり噂になってたか…なってなくてもヒソヒソ話してるだろうしね。原作よりマシなんだよ？九尾事件の死人数が７割減だから…

「わかったよ。ナルト君の所へ行くのかい？」

「いえその必要は「失礼するよ」「ご、ごめんくださいだってばよ！」来ましたね。」

「いのお茶をあと２つ「１つで良いよ」そう？じゃぁ１つ用意してくれるかな？」

いのはお茶を取りに行った。その間にナルトとカカシが来たのでカカシにはもう用は無いから帰れと言ったら「上忍を何だと思ってるの？」と聞かれたので、遅刻魔に言う権利など無いと切り捨てておいた。特製ヘルソースを見せながら（脅しである）

対話～九尾遭遇～

　ナルトにも話（前話）をしたら九尾がいる事は知っていたらしい。原作通りに聞かされたようだ。この話を聞いてしばらく考えていたようだが、また暴れたら危ないという事で結果的にナルトもする事にしたようだ。後で親の事を話しておこう。あいつらも会いたいだろうしな

「じゃぁ行くよ？御霊・転心位の術」

　この技は俺たちの体を魂と仮定して送り込む技らしい。覚えたは良いがチャクラが持続しないため使えなかったようだ。今回は出入りだけ任せるので使えるらしい。

「パパここどこ？」

「さぁ…ナルト君は分かるかい？」

「夢で見たことあるけどよく分からないってばよ」

『誰だ…誰でもいいここから出せぇ！』

　右手の方から重く大きな声が聞こえた

「きゃっ」

「いのちゃん大丈夫だよ？今のがナルトに封じられてる九尾の声なんだけど、封印されてるからね。いのいちさんから離れないようにして付いてきて、ナルトもね」

「う、うん」「わかったってばよ」

　たぶん…いや恐ろしいのだろうこの声から相手の強さが直感的に感じたのだろう。現尾獣の中で最強とされる奴だ仕方ない、上忍のいのいちさんですら冷や汗を既にかいているのだ、下忍になったばかりには刺激が強いのだろう。

　そうこうしているうちに大きな柵が見えた。

『貴様ら儂をここから出せ！あいつに儂を操ったあの男を殺さねばならん！』

「出たいのなら俺たちに協力しろ九尾」

『断る！儂はクシナから出て誰も殺すつもりなどなかったのだ！なのに奴は…奴は…あの目…』

「なっ…（どういうことだ、出るつもりがなかった？食い違いが出てきたなこれは…）その男を教えろ里のためにもな」
『奴の名はうちはマダラ…我を操った男だ！』
　九尾事件…うちはマダラを名乗る忍びに幻術を掛けられ襲ったらしい。元々クシナとは関係良好で、仲良くやっていたが殺してしまった事に罪悪感を感じているようだ…原作とは違うが、これはいい流れだ
「九尾、今お前の宿主のこのナルトが分かるか？」
『金髪の糞ガキだろーが！1人を除いてお前もガキだがな』
「ガキというのは置いておいて、いのいちさんクシナさんとナルトの関係性を教えてもらえます？本人から詳しく聞いてなかったので」
　いのいちさんはナルトとクシナさん、封印したミナトとの間柄を説明した。九尾はというと半分納得していた。しかし何か引っかかる部分があるらしいが、今は気にしてはイケナイところである。
『よかろう、クシナの児というなら力を貸してやってもいい。全力で貸せばいいのか？』
「九尾と仲良くなったと知ったら今はマズイかもしれない」
「どうしてだってば？」
「ナルト、お前の立ち位置の問題だ。
　1、九尾を封印されている
　2、何人かは生き返っているが、九尾事件の際死人が出ている
　3、九尾の力を恐れている者がいる…これがどういうことかわかるだろ？」
「それって…ナルトが九尾に操られている、取り込まれたと考える人がいるってことですか？」
「いのちゃん正解。対策はあるけどね」
『ならばその「対策を教えてくれってばよ！」だな』
　それは……
　1．初めから全力を与えるのではなく、徐々に与える。
　・里の住人を必要以上に敵意を出させないようにするため
　2．与える量は初めの頃は漏れ出る程度にする

・上記同様

3．中忍レベル及び緊急時、俺か一部の上忍が許可を出した時ある程度力を貸す

・ナルトが死んだりしたらもともこも無いから

4．みんなが認めた時力を完全に与える

・認められた火影にこいつはなりたいと言ってたからね

5．暴走はしないようにな、まぁ封印するけどもさ

・秘術とか秘術とかで

6．これがある意味決めてだな

〝クシナ及びミナトの生存を里に伝える〟

対話～九尾対話・完～

クシナとミナトの生存

この言葉を聞いていのいちさんと九尾は考えに耽った。

いのいちの思考（確かに2人の死体は見つかっていない。しかし尾獣を抜けば死ぬとされている以上、クシナさんの生存はまずありえない。しかもミナトさんは死鬼封印をしたはずだ、あれは死に直結するはずだ。いったいどういう事だ。赤い鳥と黄色い鹿のような奴が関係しているのか？）

九尾の思考（儂が幻術にかかって出たはずだ。尾獣を抜かれた人柱力は死ぬ…幻術で暴れる儂を封印したあやつも然り。…なぜ、生きていられるのだ…まさかこやつは四季の者の中でも直系の者か？それならば納得はいくのだがな。）

「九尾の尻尾もふもふー！」

「もふもふだってばよー！」

いのちゃん何やってるんですか（汗）幼児退行してない？九尾も、もふもふされてても怒らないし…ナルトも便乗しないの…

「いのいちさーんココから出るにはどうしたらいいんですかね？」

「幻術を解くようにしたら出られるよ」

「ナルトと九尾はこっちに…ここに血を垂らして？」

「何をするってばよ？」『何をする気だ？』

「特殊な口寄せだよ」

体内に居る尾獣を口寄せすることはできない為、尾獣化という方法をとるのが原作である。四季の一族は体内に居る擬似尾獣を口寄せすることができる。その技術を応用しナルトにも呼び出すことができるようにするのだ。

『成る程、やはり貴様は四季の直系か…白狐は元気か？』

あっ直系ってバレた…やっぱわかっちゃいますよね。白虎の方じゃなくて白狐の方ですか…

「元気ですよ。早く宿主探せって一番言ってるくらいです」

『そうか…終わったぞ』

「こっちも終わったってばよ！」
「口寄せはまたナルト教えるからね。今はまだ我慢ね？」
「わかったってばよ！」
「いのいちさん。２人を連れて先に出ていてもらって良いですか？ちょっと九尾と話がしたいので」
わかったといのいちさんは良い先に２人を連れて出て行った。俺は九尾に向き直り…
「久しぶりだな。九喇嘛」
『やはりこのチャクラと神力の感じはお前だったのか…』
……

話が終わったので先に出たナルト達と合流する。が、既にナルトは帰っていた…というより一楽に行ったようだ。この術は使用した場所に帰還するらしい。
ーーいのちゃんがこっちを見てる…
「ねぇねぇ四季さん？」
「どうかしたかな？いのちゃん」
「私にも尾獣ちょうだい！可愛いのが良い！」
……うぇ!?斜め上の要求が来たぞ…可愛いのねぇ…『『『私たちだね』』』
『『『俺たちだな』』』…『『『『『『黙れ！』』』』』』
お前等全員黙れ宿主無しで封印するぞ…『『『『『『すんませんっした！』』』』』』
「いのちゃん!?尾獣は里に１匹しかいないんだよ。」
「パパならなんと名なるでしょ！」
「無理だよ。こればかりはなんともね。」
尾獣は里に一匹程これは初代火影の時に決まったことである。
しかし尾獣の括りにはいらない者達は例外であった。その例外の中で口寄せに応じない者達は四季の一族によって封印または弱体化されている。
この中の数匹が今尚中に眠っているんだなこれが、厳選するか…

波の国　出立

やぁ…四季です。今は火影室にいます。
前回、いのに尾獣をちょーだいと言われて厳選した結果、大人の3倍くらいの大きさの白狐（♀）を授けることにしたよ。一度会わせてみたらすぐに懐いてたしねで、それをして良いか火影のじいちゃんに質問中なのと報告書の内容について質問を受けてたよ。ナルトたちは猫の捜索をしていたみたい。
「じっちゃん、オレってばもっと忍びらしい任務がやりたいんだってば。簡単なのはダメだってばよ」
「おいナルト！火影様と呼ぶんだ！まだ下忍なんだから大人しくだな」
「そろそろ良いと思いますよ？ナルトも実力は保証します」
ナルトには任務の後修行をつけていたのだ。多重影分身をした状態で手裏剣投げたり持久走したりが主だったけどな。多少の影分身の使い方は教えたけど
「なんであんたがナルトの実力を保証できるのよ！落ちこぼれよこいつは」
「…だからいつまでも足手まといなんだよなピンクは」
「喧嘩するでない。ならこの任務はどうじゃ？ある要人の護衛じゃ、入って来てくだされ」
火影様が声をかけると扉の外から既に出来上がった爺さんが酒瓶を持ったまま入って来た。ハーブの香りの部屋が一気に酒臭くなった
「なんじゃ超ガキばっかじゃねえか」
「何だぁ？この酔っ払いの爺さん」
「儂は橋作りの超名人、タズナと言うもんじゃ。国に帰って橋が完成するまで超護衛してもらうかのう」
「（橋作りの名人？酔っ払いの間違いだろ」
「聞こえとるぞ、そこのガキ。揃いも揃ってガキとは…死ぬ気でまもってくれよな」

一度準備があるので解散した後、門に再集合した。カカシが遅れないように尾行してました。
出発して少し経った頃
「腹減ったな」
「何唐突に言ってるのよあんたは」
「飯持ってきてるし食うわ。カカシこれあげる」
そう言って2つの赤い団子を渡す
「ん？コレは何かなな⁉？」
「特製ヘルソースでできた団子」
「いいい、要らないよ⁉？ナルトあげる」
「流石にこんな爆弾いらないってばよ！」
ナルトは自分の母監修とは知らずに爆弾発言し、投げすてる。運がいいのか悪いのか道の先にある2つの水たまりに1つ1つ落ちた…
「普通捨てる？ナルトあんた馬鹿じゃないの？」
「そんなこと言ってもサクラちゃん。あれたべれるの極々僅かだってばよ」
「「うげぇっ⁉？死ぬ⁉？辛い助けて⁉？」」
「ああなるってばよ」
「「……」」
水溜りの中から出てきた2人に驚いたというより、辛くて悶えてるのを見て、サクラとタズナは若干どころかめいいっぱい引いていた。

波の国　その2

カカシ先生が尋問しているが全然進まない
「ねぇそろそろ話してくれないかな？目的をさぁ、水もあげたでしょ？」
「辛い…」
「仕方ない…これ飲んで」
「ねぇそれ何なの？」
これは解毒薬（鎮火）だ。俺には必要ない『化け物め』お前らが言うなよ…必要ないけど、いざという時のために作っておいたんだ。今役に立っただろ？
作るのは簡単、砂糖を念入りに凝縮しなければならない面倒があるだけで、こっちのが作りやすい
「た、助かった。お礼に全部話すよ」
へぇ大元はガトーカンパニーね…
「タズナさん我々はあなたが忍びに狙われているなんて聞いていない。依頼内容はギャングや盗賊などのただの武装集団からの護衛だったはず。これだとBランク以上の任務となる。依頼は橋を作るまでの支援護衛だったはずです。敵が忍者であるなら間違いなく高額なBランク以上の任務です。何か訳ありのようですが、依頼で嘘をつかれるとこちらが困ります。これだと我々の任務外ってことになりますね」
「そ、そうじゃが見捨てるのか⁉？」
さて先生はどうするのかね。俺は続けたいんだがな
「そうですね。Bランクで依頼をしてもらって経験のある忍びに頼むのが筋でしょう」
「そうよ！Bランクなんてまだ早いもの‼？」
「俺はやってもいい」いいってばよ」
サクラの言う事も確かに正しいな…まだ下忍になりたての3人だ。連携も多少は改善されたがいざという時にはどうなるか…
「四季は？」

「もちろん「やめるよね？」サクラごめんね？…殺るに決まってる」
「先生、四季のニュアンスが違うと思ったんですけど」
　ニュアンスが違う…まだばれないようにするには時間がかかるか
「たぶんサクラの感じたニュアンスであってるよ。ガトーはね四季の一族に依頼されてる中で粛清対象に入ってるんだよ。殺すという意味でね」
「それはありがたい。頼めるかの⁉？」
「個人的に受けてもいいですが、カカシセンセも行きますよね？」
　仕方ないという感じでカカシは続行する事にした
　それにしても霧か…嫌な予感がするんだが何もないよな？…まぁ考えても仕方ないか。船も無心でナルト達の声も聞かずに漕いでたから心配されてた。
「そこっ！」
　ザザッ
「なぁんだウサギだったみたいだってばよ」
「このバカっ可哀想じゃない！」
　ナルトはサクラとサスケに怒られていたが
「カカシセンセ気付いたか？あのウサギ…」
「雪ウサギだったね…良くわかったね」
「旅の途中で見たからな。この辺に居ないのも知ってる」
　ウサギの方（右前）から殺気が来た…が、左前からも感じる
「近づいてくる殺気は任せる」
「わかった。四季も気をつけろよ」
「ナルト！「な、何ってばよ」まだ扱いきれないんだ、使うなよ？」
　わかってるってばよと聞こえた瞬間俺は左前に進んで走った。すぐに屈めと聞こえたが攻撃されたのだろうか？

「一人向かってきますね」
「気をつけろ鬼鮫、こいつは手練だ」
「へぇ、あなたがそういうんなら手応えがありそうです」
　うわぁ…鼬いるじゃん…イタチか…それに隣のやつも強そうだ

「そこに居るのは分かってますよ。出てこないならこちらから行きます。水遁　水龍弾」
「水遁　水龍弾」
　うぉぉぉい、いきなり写輪眼の複写付き高火力の水遁かよ
「いきなりかよ、危ない危ない」
「誰でしょ「四季　夜叉か…久しいな」イタチさんの知り合いですか」
「帰ってくれない？」
「それは出来ない相談だ、見られたなら殺す」
　ええ…睨んでくるよぉ…写輪眼怖い。というより鮫みたいな人もっと怖いよ！
「水遁　爆水衝波の術…私の獲物になってください」
「断るぜ、風遁「月読！」うっ」
　掛かったふりしとこう
「流石ですねイタチさん、これで終わりですよ」
　ニヤリ…
「待て鬼鮫「何でですか？」罠だ。奴は月読に掛かっていない」
「ちっ…バレタか」
「鬼鮫、反動でうまく動けん任せるぞ。敵が増えた時は撤退しろ」
「わかりましたよイタチさん。さぁ貴方には死んでいただきます」
　死にたくはない。何とか合流できれば…そんなうまくいくわけないけどさ。

波の国　その3

四季をやったのは間違いだったかな…
こちらの敵があの霧の抜け忍、桃地再不斬とはねぇ…あっちが弱いとも限らないが…
暁の一人鬼鮫と戦ってるとも知らずに…
「そいつも偽物ォ⁉?」
「しまった⁉?」
「かかったな‼?水牢の術…さぁ後はお前等を殺すだけだ。誰から殺ってやろうか」
戦いに集中し切れなかった俺の落ち度か…このままじゃまずい
「お前等タズナさんを連れて逃げろ‼?」
「逃すと思うゲハァッ⁉?」
「「あ（え?）」」
「何が起こったんじゃ⁉?」
あ、どうもサクラです。カカシ先生が捕まったので逃げようとしたところ再不斬に何か人がぶつかりました。サスケとナルトは何かしようとしていたみたいです

～遡ること数分前～
「ハァハァ…流石にまずいか…」
「逃がしませんよ。風遁　真空波の術」
「ぐっ…耐えきれねぇッ」
風遁の圧力に耐えきれず俺は、カカシ達の居る方向に飛ばされた
～終わり～
「痛っ…すまんって誰だ⁉?」
「貴様こそ誰「何処行ってたのよ‼?四季‼?」こいつ等の仲間かならば殺るまでだ」
今はこいつを相手にしている暇はない。カカシも水牢から出ているみたいだし任せるか…これだけ水があればいけるか…⁉?
「逃がしませんよ。その人達もろとも死んでください。水遁　水鮫弾

の術」
「舐めるな‼?氷遁　一角白鯨の術‼?」
右腕がやられたが血化粧・朱雀で即時傷を癒す…これでまだ戦える‼?
一角白鯨に潰されてないが撤退したようだ。
しかしまだこっちには再不斬がいる…どうする?
「まともに殺りあうと俺が負けるかもしれないな、雑魚共に使うつもりはないが見せてやろう水遁　霧隠の術」
「ちっ…四季、卍の陣でタズナさんを守れ!」
「氷遁　足枷牢の術」
カカシの声と同時に足枷牢の術を発動。この術の良いところは水の近くに居る生物の足と地面を一体として凍らせることができる。
欠点は敵味方の区別がないのと自分自身も釘付けにされる点だ。距離は判決２０ｍ未満に限るがこういう時に役立つ。
「ぬうっ‼?」
「再不斬捕まえたり」
「良くやった四季。しかしだな」
霧が晴れた。再不斬も固まっている。皆んなの足が氷漬けにされているからだろう。一番初めに抜け出したのはなんと再不斬だった。
「まずは貴様から殺してやる。これを使ったのは失敗だったな」
『させぬよ』
「誰だ…⁉?で、デカイ」
『氷遁　氷深縛』
蒼い毛の人の４倍程の大きさの狼が再不斬を捕まえていた。離れたところに再不斬を追いかけていたと思われる追い忍を捕まっていた。二人共全身氷漬けにされて居るから逃げられない

波の国　その４

さぁどうしたもんか…みんなこっちに来ない。狼さん怖いのかな？

「みんなどうしたの？」

「その狼、デカすぎない？」

「そう？「デカイってばよ」そこまで言うほどかな」

『こうすれば良いか？』

ボフンッ

『わんっ』

「仔犬になった⁉？」

「狼だ、サクラ」

これで連れて行けるね。頭に載せとくか（某魔法なのはのフ○○トの使い魔ア○フをイメージしてください）

「ところで、再不斬はこのまま引っ張っていこう」

「俺の負けだ。着いて行くから溶かしてくれ」

「先生が倒れてるんだから、溶かしちゃダメよ！」

あぁ…サクラ、お前が正しいよ。しかしな

「解氷」

「あっコラッ」

「助かったぜ。命は預けといてやるではグハッ」

ん？俺は何もしてないぞ。

「貴様足だけ溶かさないとはどういうつもりだ！」

「すまん、忘れてたわ。まぁ逃がすつもりは無いし」

「クソッ」

「後で追いかけるんで先言ってて下さい」

「気をつけろよ四季。さっきのがまだ居ないとも限らないぞ」

心配性だなぁ……追いかける方法はいくつかあるし問題ないんですけどねぇ

ナルト達は先に行った。カカシを担いで……

とりあえず影分身してっと

「影分身だと？そうか俺らを殺すのか」
「いんや？お前抜け忍としてじゃなく働きたくないか？そこの白だったか？血継限界の問題も要らないぞ、平和を望むうちはやらうずまき一族の生き残りやら色々居るからねうちの隠れ里は」
「そうか……白だけで「再不斬さんが行かないなら行きません」だがな」
　何やら内々で揉めてるらしい。まぁ言いや、影分身先に火影の所にクナイ持っていけと命令を出しておいた
「里には使いを出したから数時間で分かるだろそれまで着いてこい」
「ああ（わかりました）」
「あ、姿は見せるなよ。説明してからだ　」
　俺はナルトたちを追った。

　一方影分身の俺は里に着いた（雷遁使った）
「火影爺さん入るよー」
「誰だ貴様は」
「お前こそ誰だよ爺」
「四季よ。こやつはダンゾウじゃ」
　へぇ……この生意気（年上に対して言うことではない）な爺がダンゾウねぇ……（忘れてたわコイツの姿形）
「して、何用じゃ？今は任務のはずじゃが？」
「そうそう、忘れるところだった。暗部のビンゴブックに載ってる再不斬を除外するように全里に伝えてくんね？」
「どうし「出来るわけ無かろうが！餓鬼が何を」ダンゾウ待ちなさい」
「再不斬を四季の里の防衛部隊及び木の葉の里の特別上忍にしよう？一人下忍っぽいのも居るし俺とそいつで２マンセルにしたらいいんじゃない？緊急時のみとかでそれまでは暗部の強化教官にすれば言いでしょ？」
「協議しておこう。話は以上かの？」
「このクナイを持ってて。飛雷神の要だしじゃ」
　ドロン

言うだけ言って消えよったわい。しても飛雷神か……ミナトが教えたのかのぉ……

お、帰ってきたな

「木の葉の特別上忍として協議してくれるみたい、あと白は俺とツーマンセルになるかも。まぁ認められなくても四季の里に送り込むから着いてきて」

「わかった」

これで再不斬は味方になったかな?あとはガトーを殺るだけだ